

## 【記念シンポジウム】

### 「エイズの中長期戦略をいかにつくるのか」

■司 会：飯野 奈津子（NHK解説委員）  
池上 千寿子（特定非営利活動法人 ふれいす東京）

■演 題：

1. 国民が求めている医療とは—世論調査の結果からの報告：患者参加の医療体制作りとは  
近藤 正晃ジェームス（日本医療政策機構）
2. 国連エイズ政治宣言と国内の課題  
樽井 正義（エイズ&ソサエティー研究会議）
3. 厚生省審議官から民間へという立場から：霞ヶ関の機能、役割、限界とその克服、官民連携  
伊藤 雅治（社団法人全国社会保険協会連合会）
4. エイズ治療の最初から最前線で見してきた立場から：医療と社会の生々しいかわりから  
根岸 昌功（東京都立駒込病院）
5. HIV 陽性者組織の立場から  
長谷川 博史（日本 HIV 陽性者ネットワーク・ジャンププラス）
6. エイズ学会理事長の立場から：専門家集団としての役割と責任  
岩本 愛吉（東京大学医科学研究所・エイズ学会理事長）

趣 旨：

HIV/エイズの流行を人類が認識してからちょうど4半世紀が経過した2006年6月、ニューヨークの国連エイズ対策レビュー総会で政治宣言が採択され、2010年までの世界のHIV/エイズとの闘いの基本的な戦略の方向性が示されました。

そこでは、HIV/エイズの治療だけでなく、予防手段やケア・サポートも含む普遍的アクセス（必要とする人が誰でも利用できること）を実現する必要があることが強調されています。

そして、各国がそれぞれの実情を踏まえ、（1）国レベルの具体的な目標をもち、（2）政府、市民社会がともに実践し、（3）モニタリング・評価を積み上げる—という「3つの統一」原則の重要性も確認されました。

いうまでもないことですが、コンセンサス（国連全加盟国の一致）方式で採択されたこの宣言には、日本も賛成しています。それどころか、HIV陽性者やNGOのメンバーが顧問として参加した日本政府代表団は、各国の複雑な利害が絡む国連外交の場で、宣言草案をまとめ、採択にこぎつける困難な役割を積極的にはたし、高い評価を得ています。

しかし、そうした外交の成果も、国内のHIV/エイズ政策の中で、政治宣言が具体的な政策遂行のツールとして活かされない限り、実りあるものにはなりません。

国連エイズ対策レビュー総会の意義は、いま世界を覆うHIV/エイズの危機が途上国も先進国も等しく巻き込んだまさしく地球規模の危機であることを再認識した点にもあります。貧困と不平等の中で困難な闘いを続ける途上国への支援はもちろん大切です。

しかし、わが国の現状に目を向ければ、静かに拡大を続ける国内のHIVの感染を危機として認識し、

---

世界の戦略を踏まえたわが国の中長期戦略を打ち立て、政策遂行の基幹となすことが緊急の課題であることもまた、自ずと明らかになるはずです。

目標は誰が、どのようにして策定し、実践し、評価するのでしょうか。

わが国では昨年、感染症法に基づくエイズ予防指針の見直しが行なわれました。その検討の過程で明らかになったのは、指針の理念はよいのだが、実践とその評価のしくみが明確ではないということでした。ひと言でいえば、指針は絵に描いた餅だったということでしょう。

2010年に向けて、これまでと同じやり方を漫然と続けていたのでは、感染の広がりを抑えることはできません。現在の医療ケア体制では、HIV/エイズ診療はすでに限界に達しようとしています。医療機関がHIV陽性者を受け入れきれなくなる（いわゆるパンク状態になる）日が遠からず訪れるおそれがあります。

世界でも最高レベルの医療資源と社会基盤を有する日本のような国で、HIV/エイズ診療という医療のアクセスすら実質的に担保できないような状態では、普遍的アクセスも戦略もありません。

また、HIVに感染した人たち、感染の高いリスクにさらされている人たちが安心して医療を受けることができなければ、新たなHIV感染の予防も困難になります。

一方で、社会の中にHIV/エイズにまつわる偏見や差別が温存されていけば、仮に十分な医療資源が確保されていたとしても、HIVに感染した人たち、感染の高いリスクにさらされている人たちに対する治療へのアクセスが保証されていることにはなりません。

さらに、社会の中の多くの人たちがHIV/エイズの流行に無関心のままの状態が続けば、偏見や差別はますます温存され、拡大していき、最低限必要な治療や予防、さらには途上国支援のための予算の獲得さえ困難になります。日本がそのような国であることを私たちは望んでいるのでしょうか。

HIV/エイズ政策が単に保健医療だけではなく、広く社会のさまざまな分野を巻き込んだものでなければ成立し得ないことは、国連エイズ対策レビュー総会の政治宣言でも真っ先に指摘されています。

また、わが国のエイズ対策予防指針で個別施策層として位置づけられている男性とセックスをする男性（MSM）、薬物注射使用者、セックスワーカー、若者といった人々が自らHIV/エイズと闘う力を獲得し、対策に積極的に関与していくことを可能にするためにも、広い社会的視野のもとで、多様なプレーヤーの参加が可能なHIV/エイズ戦略の策定と実践、そして評価の機能が重要です。

人類がHIV/エイズとの闘いの25年を経験し、日本エイズ学会がエイズ研究会として発足した1987年から20回目の節目を迎えるいまこそ、そして、わが国のHIV/エイズにかかわる唯一の専門家集団としての日本エイズ学会こそが、日本のHIV/エイズ政策の中長期戦略について語る必要があります。

HIV/エイズの中長期戦略は誰が、どのようにして作るのか。そのためのシンクタンクは政府だけでいいのか。専門家集団としてのエイズ学会はどのような役割を担えるのか。

第20回日本エイズ学会・学術集会記念シンポジウムはあえて大きな課題に挑み、多様な立場のシンポジストの報告をもとにその具体的な姿と可能性をさぐっていきます。多数の方のご参加をお待ちしています。